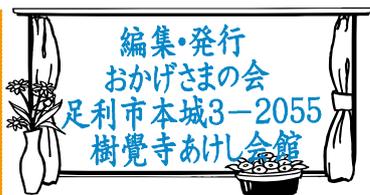


# おかげさま



お寺の一年は、元旦（一月一日の朝）の集会鐘、引き続き仏飯を供え、元旦会のお勤めに始まります。一年の終わりは、十二月三十一日の夜、除夜の鐘、そして、除夜会で終わります。一年の終わりと一年の始めの間はと言いますと、数時間の仮眠、または、…(ヒヤアセ)……。樹覚寺では、一年365日、朝のお勤めは、「正信偈六首引」をお勤めしています。元旦会も含めまして、毎月一日には、朝晨会（朝のお勤め会）が勤められています。一年を通して、朝、午前六時の鐘撞きに引き続き本堂で勤まります。



『蓮如上人御一代記聞書』には、「赤尾の道宗申されて候う。一日のたしなみには朝つとめにかかさじとたしなむべし。一月のたしなみにはちかきところ御開山様の御座候ところへまあるべしとたしなめ、一年のたしなみには御本寺へまあるべしとたしなむべしと云々」とあります。毎年の本願寺参りは無理でも、せめて、毎月のお寺参り。毎月のお寺参りが無理でも、せめて、毎日のお内仏（お仏壇のご本尊）へのご挨拶はしたいものです。

毎月一日の晨朝会、朝早いですが、ぜひ一緒にお参りいたしませんか。



ブトリとブトラ 龍大のロンくん

浄土真宗本願寺派の日常勤行には、「正信念仏偈和讃六首引」のほか、短めの偈文、「讃仏偈」「重誓偈」「十二礼」などがよく用いられます

親鸞聖人は、数あるお経の中で『仏説無量寿経』こそが「真実の

教」であると、お示しになりました。それは、“この私”の「すくい」が説かれているから、「真実」であると仰せになっておられます。

さんぶつげ  
「讃仏偈」

『仏説無量寿経』の中にある「讃仏偈」八十句の偈（一句の文字数が統一された韻文、讃歌）で、阿

彌陀さまが法蔵菩薩であった時、師仏である世自在王仏のお徳を讃え、「どれほどの苦難があろうとも、すべての“いのち”をすくうことができなければ、決して“さとり”を開かない」という誓いが述べられています。

法蔵菩薩が師仏のお徳をほめ讃えておられるので「讃仏偈」といい、「嘆仏偈」とも呼ばれています。

じゅうせいげ  
「重誓偈」

『仏説無量寿経』には、法蔵菩薩の誓いが、四十八の願で示されています。さらに、その要点を四十四句の偈をもって重ねて誓われましたので「重誓偈」とも、誓いが三度重ねられていますので「三誓偈」とも呼ばれています。

ここでは「南無阿彌陀仏」とその名をもって、すべての“いのち”に至り届き、あなたと一緒にその人生を共に歩み、“南無阿彌陀仏”の“はたらき”によって、あなたを浄土に生まれさせることができなかつたらならば、決して仏にはならない」と再度誓ってくださっているのです。

じゅうにらい  
「十二礼」

七高僧の第一祖であるインドの龍樹菩薩が、十二偈の詩の形式で阿彌陀さまをお敬いしお讃えされたものです。阿彌陀さまのお徳とお浄土のすばらしさをほめ讃え、特に最後はこのよろこびを人々と分かち合い、浄土往生を共にしたいとのお心で結ばれています。



ちょうもん こころえ  
聴聞の心得

このたびのご縁は	はつごと 初事	と思うべし
このたびのご縁は	われひとり	我一人のためと思うべし
このたびのご縁は	こんじょう さいご	今生最後のご縁と思うべし



## あけし酔話

## お釈迦様の生涯

## 降誕(こうたん)

お釈迦<sup>しゃか</sup>さまは、シャカ族<sup>しゃっしん</sup>の出身<sup>しゅっしん</sup>です。シャカ族は、カピラヴァットゥを首都とする現在のネパール<sup>りょう</sup>領<sup>りょう</sup>タラーイ地方に存在したという、小さな国の種族<sup>しゅぞく</sup>でした。

カピラとは“赤い土”という意味で、年中、山頂に雪をいただくヒマラヤ山<sup>ふもと</sup>の麓<sup>ふもと</sup>にあったこの地は、ガンジス河<sup>しりゅう</sup>の支流<sup>しりゅう</sup>であるローヒニー河<sup>すいでんこうさく</sup>に面しており、水田耕作には適した土地であったようです。

お釈迦<sup>ふおう</sup>さまの父王<sup>ふおう</sup>の名は、浄飯王<sup>じょうぼん</sup>(スドーダナ)といわれていますが、その兄弟<sup>あひな</sup>に白飯<sup>はくぼん</sup>、斛<sup>かいぼん</sup>販<sup>かん</sup>、甘露<sup>かんるぼん</sup>飯<sup>ぼん</sup>とよばれる方がたがいますので、

シャカ族は“稲作”と相当<sup>いなきく</sup>深<sup>そうとう</sup>いつながりがあつたとも考えられています。

シャカ族は、農耕<sup>のうこう</sup>には優<sup>すぐ</sup>れていたようですが、軍事<sup>ぐんじりょく</sup>力はさほどでもなく、カピラヴァットゥの西南<sup>せいなん</sup>にあった大<sup>たい</sup>国<sup>こく</sup>に隷<sup>れい</sup>属<sup>ぞく</sup>をしていたといわれています。

当時のインドは、サーヴァッティー<sup>みやこ</sup>を都とするコーサラ国と、ラージャガハを都とするマガダ国が二大強<sup>じやくしやう</sup>国<sup>こく</sup>で、弱<sup>じんえい</sup>小<sup>じんえい</sup>の国はいずれかの陣<sup>じん</sup>営<sup>えい</sup>に属<sup>ぞく</sup>することによって存<sup>ぞん</sup>続<sup>ぞく</sup>をはかっていたようです。

シャカ族も例外ではなく、コーサラ陣<sup>じん</sup>営<sup>えい</sup>に属<sup>ぞく</sup>していましたが、お釈迦<sup>めつぼう</sup>さまの晩<sup>めつぼう</sup>年<sup>ねん</sup>、コーサラ国王<sup>めつぼう</sup>ヴィドゥーダバによって滅<sup>めつぼう</sup>亡<sup>ぼう</sup>させられてしまいました。

お釈迦<sup>ぶにん</sup>さまは、スドーダナと、マーヤー夫人<sup>ぶにん</sup>の子どもとして誕<sup>たん</sup>生<sup>じやう</sup>しましたが、マーヤー夫人は、隣<sup>りん</sup>国<sup>こく</sup>コーリア族の出身<sup>しゅっしん</sup>であったと伝えられています。二人は、長い間子どもに恵<sup>めぐ</sup>まれませんでした。それは単に二人がさびしいと思うだけではなく、王は家<sup>か</sup>長<sup>ちやう</sup>としてとても辛<sup>つら</sup>い立<sup>た</sup>場<sup>ばう</sup>にあつたのです。

なぜなら当<sup>きび</sup>時<sup>せいで</sup>は厳<sup>げん</sup>しいカースト<sup>せいで</sup>制<sup>せい</sup>度<sup>ど</sup>があり、バラモンやクシャトリアは、インドの法<sup>ほう</sup>典<sup>てん</sup>である『マヌ法<sup>まの</sup>典<sup>てん</sup>』の規<sup>き</sup>定<sup>てい</sup>にしばられた生活<sup>せいかつ</sup>していましたが、そこには、跡<sup>あと</sup>継<sup>つ</sup>ぎをもうけることが家<sup>か</sup>長<sup>ちやう</sup>に課<sup>か</sup>せられた最大<sup>さいだい</sup>の義<sup>ぎ</sup>務<sup>む</sup>であることが定められいたからです。

さて、ある夜のこと。マーヤー夫人<sup>じゅんぱく</sup>は、純<sup>じゅん</sup>白<sup>ぱく</sup>の象<sup>ぞう</sup>が胎<sup>たい</sup>内<sup>ない</sup>に入る夢<sup>む</sup>を見、まもなく懐<sup>わい</sup>妊<sup>にん</sup>となりました。やがて臨<sup>りん</sup>月<sup>げつ</sup>が近<sup>ちか</sup>くなり、夫人は実<sup>じつ</sup>家<sup>か</sup>のコーリア国に向けて旅<sup>りょ</sup>立<sup>た</sup>ちました。お産<sup>うぶ</sup>は妻<sup>つま</sup>の実<sup>じつ</sup>家<sup>か</sup>で、という決<sup>けつ</sup>まりが『マヌ法<sup>まの</sup>典<sup>てん</sup>』にあり、それに従<sup>したが</sup>ったのです。

旅<sup>りょ</sup>の途<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>、ルンビニー園<sup>りんびにえん</sup>を過<sup>か</sup>ぎる頃<sup>ころ</sup>、マーヤー夫人は急<sup>きん</sup>に産<sup>さん</sup>気<sup>け</sup>づき、王<sup>おう</sup>子<sup>じ</sup>が誕<sup>たん</sup>生<sup>じやう</sup>しました。

【つづく】



新たな年、  
迎えるこ  
とが出来

# あけし あれこれ アカマツ (赤松)

ることの有り難いこと。植物、樹も一緒です  
ね。山門を入れて左手の目の前にあった、赤  
松がマツクイムシによって、数日のうちに枯  
れてしまいました。以前は山門の外にあった  
池のまわりの土手にあった赤松です。マツク  
イムシが入ると次々に移るとのことで、急い  
で切っていただきました。



糸檜葉 赤松 銀木屋

植木屋さんが、切った幹の年輪を見て、樹も正直ですよね。植え返された  
時に、樹の向きが変わったのが年輪の輪の間隔ではっきり判りますねと。樹  
齢も百五十年以上でしたよと。ということは、この寺が出来た頃にあったと  
いうことになります。シンボルツリーでしたね。松の姿が好きな私は、ちょっ  
と寂しいです。

アカマツ (赤松) マツ科マツ属

別名：メマツ 自生・植栽。常緑針葉高木・高さ35m

アカマツとクロマツ マツの種類は多いがもっともなじみのあるのはこの  
二種類だろう。自生地を見るとアカマツは山地の尾根筋などの内陸に多く、  
クロマツは海岸付近に多い。

両種の違いはまず木肌だ。アカマツは赤っぽく、クロマツは黒みがる。  
葉はアカマツが少しやわらかく、クロマツの葉は痛いほどかたい。アカマツ  
を雌マツ、クロマツを雄マツというのはこのことによる。

近年、とくにアカマツはマツクイムシの被害や大気汚染に弱いという理由  
で、植えられることが少なくなっているようだ。

方言 オンナマツ、ヒメマツ。

一口メモ 秋にとれるマツタケ  
は、本種アカマツの  
林にはえる。



赤松の切り株



赤松の年輪